2025年3月2日　第二礼拝

説教題「これに聞け」マルコによる福音書９章2～8節

主任牧師　加藤　誠

「すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。『これはわたしの愛する子。これに聞け』」（マルコ9：7）

今週３月５日の水曜日から「受難節（レント）」が始まりますが、今年はマルコ福音書を通して十字架の主の足跡を辿っていきたいと思います。今朝は、主イエスがペトロたち三人の弟子を連れて山に登られた「山上の変貌」の場面ですが、この時ペトロは相当に落ち込み、主イエスへの信仰がその根底からすっかりぐらついていたのではないかと想像します。というのも彼が主イエスから「サタンよ、退け！」と厳しく叱責されてまだ「六日の後」（２節）のことだったからです。

この直前８章の最後で、ご自身の十字架の受難をはっきり語り始めた主イエスの言葉は、ペトロを含め弟子たち皆にとって大きな衝撃でした。「ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた」（マルコ８：32）とありますが、マタイ福音書は「主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません」（マタイ 16：27）と言葉を補っています。この直前の主イエスの問い、「それでは、あなたがたはわたしを何者だというのか」に対してペトロは「あなたはメシアです」と告白しました。これまで主イエスにつき従ってきたペトロは「この方こそ我々を救い、イスラエルを救い、すべての人を救うメシアだ」と心から確信していた。その真のメシアである主イエスが人々から否定されて十字架で処刑されるなど、「とんでもない、あってはならない！」。ペトロは主イエスへの深い愛と信頼からそう語ったことでしょう。にもかかわらず、その自分が「サタン」と呼ばれて全否定された。ペトロは頭の中も心の中も、何が何だかすっかり分からなくなったのでないでしょうか。

仲間の面前で主イエスから「サタン」と呼ばれる。これは「一番弟子」のペトロのプライドを粉々にしたはずです。それだけでない。弟子としての自分が全否定され、これまで主イエスに従うために犠牲にしてきたすべてが否定されたように思えて、主イエスに対する深い反発も芽生えたのではないでしょうか。「イエスさま、『サタン』はあまりにひどいじゃないですか。あなたはご存じのはずです。わたしがあなたのことをどれだけ慕い、家族も仕事も犠牲にして従ってきたかを。イエスさま、あなたは、私たちだけでなく多くの人から必要とされている大切なメシアです。そのあなたがどうして人々から捨てられ殺されてよいでしょうか」。「いや、あなただけではない。あなたに従う者も十字架を背負い、自分の命を捨てろ！とおっしゃる。そんなことなら最初から言ってくださいよ。わたしは『人間をとる漁師にしよう』という言葉に大きな希望を感じて従って来たのに、話が違うじゃないですか！」と。主イエスを信じ

る意味、従う意味、すべてが根底から分からなくなり、抜け殻のようになり呆然としているペトロの姿が想像されるのです。しかし主イエスはそのペトロを連れて高い山に登られました。ここにわたしは主イエスのペトロに対する深い愛と期待と祈りを感じます。主イエスは、メシアとしての主イエスの本当の姿を理解できず、信仰が分からなくなったペトロを捨て置きません。粉々にされたペトロの信仰が再び新たに建て直されることを祈り願って、彼らを高い山に招かれたのでした。

聖書で「高い山」は神と出会う場所です。肉の目では見えない、肉の耳では聞こえない霊的な覚醒が起こされて、神のビジョンが示され神の語りかけを受ける場所です。この時、ペトロたちの前で主イエスの衣が真っ白に輝き始め、主イエスがモーセとエリヤと語り始めます。聖書で「真っ白」は神の使い、モーセとエリヤは「律法と預言者」（旧約聖書）の代表を意味します。ルカ福音書はこの時彼らが「イエスがエルサレムで遂げられようとしている最期について話していた」（ルカ９・31）と記していますが、「十字架の主イエスこそ旧約聖書が預言してきたメシアである」ということです。また「最期」は「エクソダス」、新しい世界への「脱出・出口」という言葉。ペトロは十字架を「終わり」と受け取りましたが、十字架は新しい世界への「脱出・出口」である、主イエスの受難と十字架の死は「救いの終わり」ではない「救いの始まり」だと示すのです。真のメシアである主イエスは、世界にあふれる人間の罪に落胆し「もう終わりだ」と絶望しかかっている私たちを、神の国の「はじまりの希望」に導くために来られたことが、ここでペトロたちに力強く示されたのでした。

この一連の出来事から示されるのは、イエス・キリストの信仰は「自分自身の愛と信仰の否定」「自分は神の前にサタンと呼ばれても仕方ないという自覚」から始まるということです。ペトロは主イエスを慕い愛していました。神から遣わされたメシアであると信じていました。けれども主イエスは「ペトロの期待と救いのイメージ」とはまったく異なる仕方で、私たちを救いの希望に導かれます。ペトロの信仰と愛は救いではないのです。神のなさり方で／神の救いが実現する。その神に従う信仰が求められているからです。私たちが自分の愛や信仰にこだわり、手放せない限り、神さまに従い、神さまの救いにあずかることはできない。どんなに主イエスを愛していると思っても、実は自分の中にサタンがいることを認めていく。ここから主イエスと神への信仰が始まります。

私たちは自らの信仰を顧みる時、ペトロ以上にその心に「サタン」を抱えている者ではないかと問われます。私たちは、神が「これはわたしの愛する子、これに聞け」と言われる方にほんとうに「聞く」ことができているでしょうか。自らの理解や知恵の正しさに「聞く」のではなく、十字架の主に「聞く」。今年の受難節、聖書が「これに聞け」と指し示す方に心して聞きながら歩んでいくことができますように。